

次の小説は、小学三年生の弘と小学一年生の洋二という兄弟が、かつて飼っていた犬に会うために、林をぬけて町の住宅地へ行く話です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

弘と洋二が、母親と公団住宅に引っ越してきたのは、三月の初めだった。空き部屋に応募して、入居が決まった。比較的古い団地だが、武蔵野の名残をとどめた高台にあって、自然の環境が母子を喜ばせた。

前に住んでいた家は同じ町の、高台の下にあるが、いまは人手に渡っている。——兄弟は母親から、そう聞いている。父親がいたときはもちろん、いなくなつてから一年間も、母子はその家に住んでいた。小さな家だったが、庭があった。庭の隅には、犬小屋が置いてあった。

弘と洋二は、コロという名の犬を飼っていた。秋田犬の雌で、生後二年足らずだが、後ろ足で立ち上がると弘の背丈ぐらゐはあった。めつたに吠えることはないが、夜なかに怪しい物音がすると、雌犬にしては野太い声を上げて威嚇した。おかげで母子は、父親がいなくても安心して眠ることができた。そのコロと、兄弟は二カ月余り会っていない。団地に引っ越したとき、よそに預けてきたのである。団地では、犬を飼うことはできないからだ。

「ねえ、ママ。……どこにコロを預けたの」  
「コロに会いに行きたいよ。ねえ、ママったら」  
弘と洋二は、毎日のようにせがんだ。しかし、母親はこう応えるばかりだった。

「コロに会ったら、別れるのが、また辛くなるでしょ。……会わないほうが、いいの。我慢をすれば、そのうちきつと忘れることができるわ」  
そういう母親の顔が、何かに耐えるようにゆがんでいるのを、弘は見ている。なんとなく、これ以上せがんではいけないなと思う。それで弟の口も閉ざさせるのだが、翌日になると、ついまたせがんでしまうのだ。

——町に下りてゆけば、コロの居場所なんて、すぐ分かるんだけどな。  
弘はそう思っている。だが、小学校は団地のそばにあるので、なかなか町へ行く機会がない。そのうえ、特別の用事でもないかぎり子供だけで町をうろつくのは、学校でも厳しく禁止されているのだ。

雑木林のなかには、思ったより奥が深かった。団地の五階のベランダから見渡すと、林はほんのひこまたぎでぐるぐらに見え、その先に住宅地の屋根が列なっている。さらに、そのはるか彼方に可憐な木立の横這いになっている。もはや背後には木々の群れしか見えない。  
「洋二……あれ、ほんとにコロの声だったよな、せつないだよな」  
「うん、せつない」

洋二は、兄の歩幅に合わせて、できるだけ大股に歩きながら応えた。息が弾んでいる。頸筋からポロシャツの背中にかけて、じつとりと汗をかいている。  
「ゆうべも、その前の晩も、聞こえたよな」  
「うん、その前の晩も、聞こえた」

二人は、林の向こうに犬の声を探さうに耳をそばだてた。しかし、聞こえたのは、遠くを走るバイ

クの音だけだった。

このところ兄弟は毎晩のように遠い犬の声を聞いていた。激しく吠えるというのではなく、ほんの二三声ずつ間をおいて、野太い声で威嚇するように吠えているのだ。——それは、きまってる夜の十時ごろ、雑木林の奥から聞こえてきた。

最初に気づいたのは、四日前だった。二人で九時ごろまでテレビを観たあと二段ベッドに入ったが、寝つかれないまま闇を見つめていたら、下段から洋二が弘に声をかけた。

「お兄ちゃん、……コロが吠えている」  
まさにコロの声そっくりだった。弘は、思わず窓を開けて、コロオ、コロオと叫んだ。林の向こうにコロがいる、と思いつめた。日曜日を待って、母親に内緒で雑木林に入ってきたのは、そのためであった。雑木林の小径は、まだまだつづいている。十分ほど歩いて、少し疲れが出てきたころだった。洋二が、急にいいだした。

「お兄ちゃん、……足がかゆいね」  
① 遠慮がちに小さな声だった。弘も、さつきから半ズボンの裾際を掻いている。  
「蚊だよ。……これくらい、がまんしろ」  
「真つ黒だよ、お兄ちゃんの足……」

見ると、裸の足に黒い蚊の群が斑になって食いついていて、弘は、あわてて野球帽を脱いで、足をはいた。痺れるような、かゆみが襲ってきた。狂ったように激しく足踏みをした。  
「走ろう、お兄ちゃん」  
「おまえ、さきに走れ。……ころぶなよ」

不思議なことに顔や腕には蚊はとまらない。もっぱら足だけを狙ってくる。それに、蚊が集まるのは弘のほうに多く、洋二にはそれほどでもない。  
——いつだって、そうなんだ。

弘は前を走ってゆく洋二の細い足を見ながら、そう思った。  
——ひどい目にあうのは、いつだって、ほくのほうなんだ。

弘は、父親に殴られたことを思い出している。酔って帰宅して母親と喧嘩になると、泣いてとめようとする弘を、父親は邪魔ものを排除するように殴りつけた。それも、一度や二度ではなかった。そんなときでも、いつも洋二はぐっすり眠っているのだ。

——それに、洋二はいつだってママと一緒にだから、いいよな。  
冬休みのあいだずっと、弘だけ叔母の家に預けられた。都心のマンションに暮らす叔母夫婦には幼稚園児と赤ん坊がいて、弘はほとんど終日、子守役を押しつけられていた。そのうえ冬休みが終わって学校に行くと、同級生たちが弘の家庭の内情を囁き合っていた。父親が家を出て、ほかの女と暮らしていること。間もなく両親が離婚することなどを、なぜか彼らは詳しく知っていたのだ。そのことでも、弘は辛い思いをした。団地のそばの学校に転校するまでの三学期いっぱい、弘はクラスじゅうの好奇の視線を一身に浴びる屈辱的な毎日を送っていた。

——洋二は、ア、そんな目にあわなくてすんだんだ。  
弘は、ときどき弟が憎らしくなることがある。何も知らない弟の分まで、不幸を背負わされていると思うことがある。

注1 屈辱的(くつじよくてき)やり返し(やり返し)のような、はずかしい思いをいだくこと。

木立が密集している場所に来たとき、弘はそつと走る速度を落とした。洋二は気がつかずに、懸命に前へ走っていく。

「ばあか、ひとりぼっちになつてみる」

弘はそうつぶやいて、小径から木立のなかへ駆け込んだ。そのまま、こつそりと櫟の根かたにうずくまった。藪蚊が頸筋を襲ってくる。手の甲にまで食いつこうとする。弘は、そつと追い払いながら、息をひそめていた。

しばらくして、小さな足音が近づいてきた。ひどくあわてた、乱れた足音だった。半泣きの喘ぎが高まっている。

「お兄ちゃん、……お兄ちゃん」

心細い声で低く呼んでいる。弘の予想したよりも激しいあわてぶりである。

「おい、洋二。……どうしたい」

弘は「イ」しながら、立ち上がった。洋二は、涙を溜めた眼で兄を見つめた。

「……あつちに、へんなやつらがいるの」

洋二が、いま来たほうを指さして告げた。あわてていたのは、そのせいしかなかった。弘はがっかりして、口をとがらせた。

「へんなやつらつて、どんなやつらだい」

「お兄ちゃんより大きなやつらが、三人」

怯えた顔を、弘は睨みつけた。強がって見せたのだが、内心びくつくものがあった。

「行こう。……どんなやつらがいたつて、へつちやらさ。心配すんなよ」

中学生らしい少年たちが三人、小径のそばの木株の根もとにしゃがみ込んでいた。土を掘って、何かを探しているようだった。弘と洋二は、そつと通り抜けようとした。すると、三人が一斉に顔を上げた。

「お前ら、どこに行くんだ」

一人が大人のような太い声でいった。弘は、足をとめて、どもりながら応えた。

「あつちです。……林の向こう」

「そうか。でも、この道のまま行つたら、すぐに行き止まりだぜ。新しい家が建つんで、道がふさがれてんだよ」

②あとの二人が、鋭い眼で弘と洋二を見つめていた。いちばん大柄な少年が、いきなり兄弟を手招きした。

「おい。ちよつと、ここにきてみな」

弘は逃げだしたいのを泳え、洋二を背中に隠すようにして近づいた。膝が震えていた。

「すぐく蚊に食われてんじゃねえか。足じゅう真つ赤だぜ。……かわいそうに」

「おい。林に来るときは、こんなのを持ってこなきやダメだよ。ほら、足を出してみな」

大柄な少年がポケットから取り出したのは、チューブ入りの「かゆみ止め」だった。白い薬を大量に手のひらに取って、弘の足に塗りつけはじめた。冷たいような爽やかな感触が広がって、かゆみが消えていった。

注2 根かた、根もと。

注3 喘ぎ、せわしく息をすること。

「なんだよ、おまえ、泣くなよ。……おれたち、いじめているわけじゃねえだろ。ばか」  
「そうか。スウスウして気持ちいいんで、泣けてきたんだよな。さあ、もうだいたいしようぶだぜ」  
中学生にからかわれながら、弘はむしように胸が熱くなって、涙を落としてつづけた。洋二が、心配そうに見上げていた。

「この道を行くと、途中に細い道が分かれているから、そつちへ行くといいぜ。おれたちがつくつた新しい抜け道なんだ」

「はい。……ありがとうございます」

弘は、先生に向かつてするように、礼儀正しくお辞儀をした。洋二も真似て、最敬礼していた。そのとき、中学生が探しているものが、弘にも分かった。地面に置かれた透明なビニール袋のなかに、短い角をもったカブトムシの蛹が五匹ほど見えた。

中学生たちに教わったとおりの抜け道を行くと、間もなく林を出ることができた。林の向こう側は、新興の住宅地であった。広い庭とガレージ付きの瀟洒な家々が、きつちりした区画に分けられて建ちならんでいた。

弘と洋二はコロを探しはじめた。林を越えて声が聞こえてきたのだから、きつと林に沿ったあたりにいる、と見当をつけていた。

「コロ、コロオ。……コロ、コロオ」

二人は、かつての調子で呼びながら歩いた。家々から、呼応するように犬の吠え声が上がった。しかし、たいていは家のなかからで、しかもスピッツのような甲高い声だった。

「お兄ちゃん。……コロがいたよ」

洋二が目敏く見つけたのは、大きな鉄の扉がある家だった。格子になった門扉の向こうで、白い秋田犬が尾を振っていた。二カ月余り会わないうちに、すっかり大きくなっているが、コロにちがいがなかった。耳の立った形も、丸めた尾の振り方も、眼つきまで、コロそのものだった。

二人は門扉に駆け寄った。コロは、ますます激しく尾を振った。洋二が格子のあいだから、手を差し入れたとき、弘はどきりとした。とつさに洋二をとめようとしたのが何故なのか、そのときは自分にも分からなかった。コロはゆっくりと洋二の手先を嗅いでから、長い舌を出して舐めはじめた。

「コロ、さびしかったろ。……ここにいたんだね。毎晩、ぼくたちを呼んでたんだね」

洋二が話しかけているあいだ、弘はコロのようすを見ていた。コロはたくましく、筋肉も張っていて、もうすっかり成犬だった。

「洋二、行こう。……はやく」

弘が、いきなり洋二の肩を引っぱった。洋二が尻もちをつきながら、門扉のなかを見ると、玄関のドアが開くところだった。

「どなたかしら、犬に近づくと危ないわよ」

声が出たときには、二人とも隣家の塀のところまで逃げていた。コロが、一声だけ、いつもの野太い声で短く吠えた。

注4 新興、新しくできたこと。

注5 瀟洒、すっきりとしていて、おしゃれであること。

「コロ、元気だったね、お兄ちゃん」  
雑木林に入ったとき、<sup>⑤</sup>それまで黙りこくっていた洋二が、そつといった。

「ああ、元気だったな」

弘は短く応えただけだった。あとは思いに沈んだ顔で、

「また、会いに来ようね、……お兄ちゃん」

「ああ、……また来ような」

ウ

応えながら、弘は学校で聞いた同級生の言葉を思いだしていた。——それは、弟にはけつして話せないことだった。その同級生は、弘と同じように新学年から団地に引っ越してきたのだが、前の家で飼っていた犬について話していた。

「うちの犬はね、保健所に連れていかれたんだ。……団地では飼えないし、誰も引き取り手がないんで、始末してもらったんだよ」

弘は、「始末」という言葉がすぐには分からなかった。その意味を説明されたとき、弘は相手を殴りつけたいほど憎んだ。いま、雑木林の小径をたどりながら、弘はその「始末」という言葉を反芻している。

弟にはけつして話せないことが、もう一つあった。さっきのコロのことである。

——あれは、コロじゃなかった。

弘は、肩をすぼめてうつむいた。

——だって、あの犬にはオチンチンがあつたんだもの。

弘は、洋二とならんで、唇を固く結んだまま歩きつづけた。

(内海隆一郎「30%の幸せ」による)

注6 反芻、頭の中でくりかえすこと。

問一 —— 線部①「遠慮がちに小さい声だった」とありますが、なぜ洋二はこのようにしたのですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 初めて歩く林の中はどことなくさびしくて、兄と何か話していないと辛かったから。
- 2 兄におくれないうように歩くのが辛くて泣き言をいっていると、思われなくなかったから。
- 3 家で聞いた犬の声が本当にコロのものだったかどうか、だんだん自信がなくなってきたから。
- 4 兄の足に蚊がたくさん食いついていることに気づいたが、言うとな怒られそうだったから。

問二 ア に入れるのにもっとも適切な文を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 生まれたのが後だから
- 2 父親から殴られたことがないから
- 3 最初からいまの学校だから
- 4 友達にめぐまれてるから

問三 イ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 あたふた
- 2 おろおろ
- 3 ふらふら
- 4 にやにや

問四 —— 線部②「あとの二人が、鋭い眼で弘と洋二を見つめていた」とありますが、これはどういうことですか。その説明として適切なでないものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 弘と洋二が自分たちと同じようにカブトムシの蛹を捕ろうとして、この林に入ってきたのかどうかをはつきりさせようとしたということ。
- 2 弘と洋二がまだ幼いとはいえ、何かいいものをもっているかもしれないので、それを見逃さないようにしようとしたということ。
- 3 弘と洋二がなぜ、最初から自分たちをさけるような態度をとり、受け応えもあいまいなのか、そのわけを見定めようとしたということ。
- 4 まだ小学校低学年くらいの子供がたった二人だけでなぜ雑木林の奥から歩いてきたのか、その事情を探ろうとしたということ。

問五 —— 線部③「弘はむしろ胸が熱くなって、涙を落としてつづけた」とありますが、この時の弘の気持ちの説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 三人組が自分たちに悪さをするのではないかととても不安だったが、薬を塗ってくれるようなやさしい人たちだとわかって、それまでの緊張がとけたということ。
- 2 林を通るのにかゆみ止め一つ用意することができなかったことが、自分でもなさげなく、それを弟の前で指摘されたのが悲しかったということ。
- 3 大柄な少年が取り出したものが本当にかゆみ止めで、しかもそれがとてもよく効いたので助かったという思いがこみあげてきてうれしくてならなかったということ。
- 4 中学生たちが自分のことをばかにしてからかかっているとわかって、かゆみ止めを塗ってもらっているのも何とも言えないことがぐちゃぐちゃだったということ。

問六 — 線部④「弘はどきりとした」とありますが、なぜ「どきり」としたのですか。その理由として最も適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 洋二ひとりが「コロ」と仲良くなってしまうのではないかと思ったから。
- 2 かつて父親から殴られた記憶がよみがえってわけもなく恐くなってしまったから。
- 3 勝手に「コロ」をかわいがったりしたら飼い主にしかられると思ったから。
- 4 洋二がもしかすると「コロ」に手をかまれるのではないかと思ったから。

問七 — 線部⑤「それまで黙りこくっていた洋二が、そつといった」とありますが、なぜ洋二は「黙りこくっていた」のですか。その理由として最も適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 二カ月余り会わないうちにコロがすっかり大きくなっていたので、次に会う時にコロがまだそれほど変わってしまいか、不安でならなかったから。
- 2 母に内緒でコロを探しに来たことを気にして早く家に帰ろうとした弘が、洋二の肩を無理に引っぱったので、その乱暴な態度が気に入らなかったから。
- 3 コロと再会できたことはうれしかったが、よその家の犬となってしまうとコロとずっと一緒にいられないことが、つらくてならなかったから。
- 4 子供だけで町をうろつくのは学校で厳しく禁止されているので、コロに会いにまた住宅地へ来ることができるとか、心配になったから。

問八 ウ に入れるのにもっとも適切な文を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 目を大きく開いた
- 2 口を一文字にしていた
- 3 耳をかたむけていた
- 4 鼻を鳴らした

問九 この小説のなかで、弘は洋二に対してどのような気持ちを感じていますか。その説明として最も適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 弘は、自分よりも洋二のほうが母親からかわいがられることが多いと日ごろから感じていて、しかもそれを恵まれていないと感じていない弟に対して、どうしてもやさしい気持ちにはなれないでいる。
- 2 弘は、父親のことを知らない洋二をかわいそうだと思っていて、弟がいつも母親からかわいがられているのをおもしろくないと感じてはいても、結局は弟がさびしい思いをしないようにと気を配っている。
- 3 弘は、自分が洋二よりも損な目にあうことが多いのを不満に思いつつも、兄としてのほこりと責任感とから、まだ幼くてたよりなさの残る弟が傷つかないように思いやる気持ちを持ちあわせている。
- 4 弘は、兄弟仲良く助け合うように母親から言われているが、まだ幼い洋二に自分が助けられているなどとはとても考えられないので、やはり自分が世話をしやるしかないのだとあきらめている。

問十 — 線部「そういう母親の顔が、何かに耐えるようにゆがんでいるのを、弘は見ている」とありますが、この小説の最後の場面の弘であれば、そのとき「母親の顔が、何かに耐えるようにゆがんでい」たのはどのようなわけがあったと考えるでしょうか。その理由を六十五字以上八十字以内で説明しなさい（句読点を含みます）。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注1 エドワード・グレイ卿は一九三三（昭和八）年七十一歳で、日本の大々的大陸出兵など知らず世を去るのですが、そのあとあらわれた「典型的」な英国の政治家を一人挙げるとすると、やはりチャーチルでしょうね。

一九四〇年五月、ナチス・ドイツの軍隊がオランダ、ベルギーへ侵入したのと日を同じうして挙国内閣を組織し、第二次大戦終結の直前まで首相をつとめます。

ただ、サー・ウィンストン・チャーチル、実は第一次大戦当時、すでに海軍大臣だったんですよ。アスキス首相の下でグレイ外相と席を並べていたんだけど、それがダーダネルス作戦失敗の責任を負わされて大臣の職を去り、陸軍の一将校として西部戦線に出て行くことになるんです。

その頃のチャーチルについてまた一つ、小泉信三先生お気に入りのエピソードがあるんでしてね。ドイツ軍と対峙している冬の塹壕の中は、寒くてたまったもんじゃやない。前線の英軍将兵は飲酒厳禁なんだけど、チャーチルの大隊でも、みんな日が暮れるとウイスキーかシェリーの瓶をあけてこっそり飲んでた。

ある晩そこへ突然連隊長の大佐が巡視に入ってきたので、慌てた若い士官が、あけたばかりのシェリーの瓶に手早く蠟燭を立てて燭台にしてごまかしてしまおう。大佐は気づかなかったようで、何も言わずに帰って行ってしまう。

それから何週間か経って、帰国休暇を許されたその若い士官がロンドンの陸軍将校クラブへ、飯食いに入ったら、偶然先日（偶然）の連隊長も来ていて、ぱったり顔が合う。連隊長の大佐は若い士官をバーへ誘い、ボーイにシェリーを二杯注文して杯挙げて言うには、

「君、このシェリーは蠟燭の匂いせんよ」。

この大佐がどんな経歴の軍人か知らないが、明らかに大人の智慧を持った人だった。日本人に、知識（Knowledge）はもう十分ある。欠けているのはこういう智慧（wisdom）だ、というのが小泉さんの結論です。

日本の軍隊だったら塹壕の中で即ピンタ、でなければくたくたと長いお説教でしょうが、三つのうちどれが一番効果的か。うまくごまかせたと思っていた青年将校にとって、「蠟燭の匂いせんよ」は、鉄拳制裁の百倍分くらいこたえたんじゃないでしょうか。実利的というなら、やり方がまさに実利主義的なんです。

若き日の小泉信三は獅子文六さんと同様、一時英国より大陸ヨーロッパの方に関心が向いていたのですが、結局、伝統尊重実益重視の国イギリスで経済学を学んだ。それが良かったと回顧して次のように言っています。

「青年の私は初めてイギリスに来て、やはりこれが礼讓ある民というものだろうと思うことが多かった」

注10 「イギリス人の俗物性や偽善性なるものを掻き立てて指摘することはたやすいだろうが、治にも乱にも、彼らが何か守ることを持してたやすく動かない国民であるとの印象はかわらない」

注11 軽躁の反対だということですね。

（中略）

そんな風で、「何か守るところを持してたやすく動かない国民」だから、万事日本人のように手っ取り早くはいきません。

英国の市民墓地へ夜入ると、墓石の下から笑い声が聞こえて来るといふ怪談がある。英国人は反応が鈍いので、生きてる時間いたおかしな話のおかしさが死んでから分かって笑ってるんだと、これはむしろ彼ら自身の作り話。

注12 議会でイギリス出身の議員が、スコットランド人を侮辱する演説をした。こっちは実話。「イギリスでは馬しか食わない燕麦（oats）を、スコットランドでは人間が食っている」この発言にすぐさまスコットランド出身の議員が応じた。

注13 「仰有る通りなり。だからスコットランドの人間が優秀で、イギリスの馬が優秀なのです」日本の国会だったら前者の差別発言、ただでは済まないでしょうが、ロンドンの議会は、爆笑で終わったといえます。英国の国民性に、アを貴ぶ一面とイを大切にする一面があることは、注目に値するのではないですか。

注14 藤原正彦さんが十六年前に新潮社から出した『遙かなるケンブリッジ 一数学者のイギリス』は僕の愛読書で、何遍も読み返してありますが、それはこのケンブリッジ滞在記が、英国人のセンス・オブ・ヒューモアという意外にもつかしい問題を考えるのに、大変参考になるからです。

藤原さんが文部省の在外研究員としてケンブリッジへ着いて間もなく、リチャード・コリンズと名乗る数学科講師がひよっこ研究室へあらわれ、四方山話の途中、不意に真顔になって、

注8 獅子文六は一九三三―一九六九、小説家、劇作家。

注9 礼讓は礼儀をつくして謙虚な態度を示すこと。

注10 俗物性、物欲や名譽欲などの世俗的な欲望から離れることのできない性格。

注11 偽善性、うわべだけ善良そうに見えること。

注12 軽躁は軽はずみに騒ぐこと。

注13 イングランド、スコットランドとともにイギリスを構成する四つの国の一つ。

注14 藤原正彦は一九四三―、数学者。

注15 ケンブリッジはイギリスの名門大学の一つ。

注16 センス・オブ・ヒューモアはユーモアの感覚。

- 注1 エドワード・グレイ卿は一九三三、イギリスの政治家。第一次世界大戦時の外相。
- 注2 チャーチルは一九七四―一九六五、イギリスの政治家。第二次世界大戦時の首相。
- 注3 挙国内閣は戦争などの国家的危機の際、対立政党も加えて組織される内閣。挙国一致内閣。
- 注4 ダーダネルス作戦は第一次世界大戦中の一九一五年に行われた、イギリスを含む連合軍がイスタンブール（オスマン帝国、現トルコの都市）の占領を目指した作戦。
- 注5 小泉信三は一九八八―一九六六、経済学者。戦前戦中の慶應義塾長。戦後は皇太子（現天皇）の教育掛であった。
- 注6 塹壕は戦争で、歩兵が砲撃や銃撃から身を守るために使う穴または溝。
- 注7 鉄拳制裁はけんこつでなくって懲らしめること。

「イギリスで最も大切なものはユーモアだ」と言った。

この言葉は藤原在外研究員の頭の隅にひっかかり、何故大切なのか、そもそもユーモアとは何か、それを統一的に説明することは可能か、数学者らしく相当突きつめて考えてみたらしい。得た結論が『遙かなるケンブリッジ』の最後の章に書いてある。

僕流に要約しますと、ユーモアには **PEE** と呼ばれる駄じやれの類いから辛辣な皮肉や風刺、ブラックユーモアまで、多種多様な形があつて、英国のある種のユーモアなど、英国紳士の生活や感覚を知つていないとそこのおかしさが分からない。だけど、ユーモアの複雑多岐な形を貫いて、一つ共通することは、<sup>⑤</sup>「いったん自らを状況の外へ置く」という姿勢、「対象にのめりこまず距離を置く」という余裕がユーモアの源である。

真のユーモアは単なる滑稽感覚とは異なる。人生の不条理や悲哀を鋭く嗅ぎとりながらも、それを「よどみに浮かぶ泡」と突き放し、笑いとばすことで、陰気な悲観主義に沈むのを斥けようというのだ。それは究極的には無常感につながる。英国人にとってユーモアは、危機的状况に立たされた時最も大きな価値を発揮する。——まあそんなところでしょうか。

これからあとは、『遙かなるケンブリッジ』の引用ではなく、ごく最近著者が直接私に語ってくれたことですが、三十人くらいのイギリス紳士にリチャードの言葉を伝えて、どう思うかと聞いたたら、全員が「アイ・アグリー」だったそうです。

「びつくりしましたね。どんなに頭がよくても、家柄がよくても、人格が高潔でも、ユーモアがないと」  
「ウ」の資格がないと言うんです」と藤原さんは言っていました。

(阿川弘之「大人の見識」による)

注17 辛辣、非常に手厳しいこと。

注18 不条理、理屈に合わず、うまくゆかないこと。

注19 よどみに浮かぶ泡、よどんだ川の水に浮かぶ泡のこと。はかないものの喩え。

注20 アイ・アグリー、賛成だ。

問一 —— 線部①「君、このシェリーは蠟燭の匂いせんよ」とありますが、この連隊長の言葉には、どういう意味が含まれているでしょうか。もっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 目をつぶっていてあげたのだから感謝しなさい。
- 2 君の規律違反は許すわけにいかない。
- 3 このシェリーは変な匂いがしなくてうまいな。
- 4 そういえば、気づいていたんだけどね。

問二 —— 線部②「三つのうちどれが一番効果的か」とありますが、筆者は三つのうちどれがどのよう効果的だったと言っているのでしょうか。「この若い士官にとって、」に続き、「という意味で効果的だったと筆者は思っている。」へ続くように、**四十字以上五十文字以内**で説明しなさい(句読点を含みます)。

問三 —— 線部③「軽躁の反対」とは、どのようなものをそなえた人のことだと筆者は述べていますか。その内容を説明する**五字の語句**を、この——線部③より前の部分から抜き出し、正確に書きなさい。

問四 —— 線部④「ロンドンの議会は、爆笑で終わった」とありますが、議員たちはなぜ「爆笑」したのでしょうか。その理由としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 悪口を言われても、その何十倍ものひどい悪口をすぐに返したことで、胸がすくような思いがしたから。
- 2 すぐに怒ったりせずに、相手の言葉を逆手にとって、さらりと言い返したところがいかにもスマートだったから。
- 3 全く関係のない例を持ち出して、議員たちを煙に巻いて、緊迫しそうなになった議論の場を啞然とさせたから。
- 4 相手の間違いを正確に指摘して、それを冷静に述べているところがすぐれた知性の高さを示していたから。

問五 —— 線部⑤「ア・イ」に入る言葉の組み合わせとしてもっとも適切なものを、次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- |   |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|
| 1 | ア | 鈍感さ  | イ | おかしさ |
| 2 | ア | 落ち着き | イ | 皮肉   |
| 3 | ア | 重厚さ  | イ | ユーモア |
| 4 | ア | 明快さ  | イ | 余裕   |

問六 — 線部⑤「いったん自らを状況の外へ置く」とはどういうことでしょうか。その説明として  
もっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 自分がどんなに不幸な立場にいたとしても、それを嘆くことなく、「こんなこともあるさ」と  
笑い飛ばしてしまうこと。
- 2 うまくいかないことがあった場合に、「いつもこんなことばかりだ」と陰気な悲観主義に陥っ  
てしまうこと。
- 3 いつもほがらかに前向きに生きて、冗談ばかりを言いながら、うまくいかない人生に目を背け  
て生きていくこと。
- 4 相手に追い詰められてしまったとき、どうしたらこの状況を逆転できるかを考え、辛辣な皮肉  
で相手を逆に責め立てようとする事。

問七 ウ について、あなたはこの文章全体を読んで、筆者の理想を述べた結論として、どのよ  
うな言葉がふさわしいと思いますか。次の文にも当てはまる漢字二字の語（または語句の一部）  
を本文中から探し、正確に書きなさい。

「ウであれ。」

三

次の — 線部①〜⑧のカタカナの部分で、⑨・⑩の漢字の部分を書きなさい。い  
ずれも一画一画をていねいに書くこと。

民意を政治にハンエイさせる。①

海外支援活動にジュウジする。②

さまざまな意見を聞いた上でシュンヤする。③

支出のウチワケを明らかにする。④

保守とカクシンとで意見が対立する。⑤

グループ内の決裂はヒツシだ。⑥

旅行に出発する予定を一日ノはず。⑦

司会役をツトめる。⑧

亡くなった方々に花を供える。⑨

地域の活動に奮って参加する。⑩

(以下余白)